

マキとハルナ

七原ハルコ

夜になると目が見え辛くなることに気がついたのは数日前で、ついには視線をずらさないとものはつきり見えなくなつて、仕事終わりに同僚と病院に行った。後天的夜盲症。物々しい病名に不安になるが、ビタミンA不足で起こるらしい。薬をもらったからそのうち治るだろう。

アパートにも同僚はついてきた。何度も帰れと言つたが、彼女は聞く耳を持たなかつた。部屋に上がるなり、失礼します、と言つて冷蔵庫を開け、ため息をついて、買い出しに行くと言ひ出した。ついていくと言えば見えづらくせに、と言う。暗いのに女一人で、と抗議しても無視された。彼女が僕の言うことを聞いた試しがない。二十一世紀の世に生きていてビタミン不足つてどうよ、とイヤミを言うことを忘れずに、彼女はパンプスをつっかけて出ていってしまつた。

ソファに沈みこむ。無音なのが落ち着かなくてテレビをつけた。画面は見ないままだったが、歌番組でもしている

のだろう。僕は音楽にあまり興味も持てなかつたが、もう一度リモコンに手を伸ばすそれだけの動作がどうにも面倒くさくてそのままだった。考えるのはさきほどの同僚の捨て台詞だった。前に一度同じようなことを言われたことがあるような。確かにある。誰に。ハルナに。二十一世紀に栄養失調つてどういうこと、と。確か高校を卒業してすぐだった。久々に会おうと約束した日に僕が倒れたから、病院まで迎えに来てくれたのだ。

初期設定のままの着信音が響いた。ポケットから携帯電話を出した。画面に同僚の名前が表示されている。僕は左手の親指で画面に触れた。

「無事ですか」

「残念ながら生きてるよ。それより、聞くの忘れてたんだけど食欲ある？」

「それなりには」

「何か食べたいものは」

「何でもいいよ」

それ一番困る答えらしいよ、彼女できたら気をつけなね、と同僚は特に困つた風でもない声音で言った。彼女の頭の

中でメニューはすでに決まっているのだろう。スーパーのCMソングが彼女の声の後ろで鳴っていることには気づいていた。

「あーごめん。ありがとう権田さん」

「アンタはいつもいつもいつもいつも名字で呼ぶな名前  
で呼べ春菜って」

「嫌です」

「……何でもって言ったね。文句言ったら殺すから」

物騒な言葉が聞こえてすぐに通話は切れた。名字で呼ぶことは彼女の怒りのスイッチを押すことに他ならない。ゴンドラ、という語感はなんだかごつごつとしていて気に入らないのかもしれない。分かった上で僕は同僚を不機嫌にさせてばかりいるが、仕方のないことだと思っっている。権田さんは元カノと同じ名前だった？ と当たらずも遠からずな推理を僕に披露した。僕は反応しなかったし彼女もそれ以上踏み込むことはなかった。僕は彼女の意外な思慮深さ、触れて欲しくない部分を察するところを好ましく思う。だからこそ、彼女には申し訳なく思っている。僕がハルナと呼ぶ人間は一人だけでいいなんて、とんでもなく理不尽

な自分ルールでしかない。

ふと聞き覚えのあるフレーズが耳に届いて、僕は目を開けた。番組では昔の曲も取り上げるらしい。泥臭いビート・パンク。叫ぶように、ハスキーボイスで歌いあげるフロントマン。当時のロック少年たちのあこがれだということと、ギターリストが数年前のクリスマスに急死したことが、画面の左下隅に書かれていた。高校最後の夏の日、ハルナのプレイヤーに入っていたこの曲を、イヤホンを一つずつ分けあって僕とハルナは聞いたのだ。一つの要素が他の記憶も呼び覚ました。屋上に続く階段の、非常扉前のスペース。物陰に二人腰をおろして、教師たちの忙しない足音を遮断するようにハルナは音量を上げた。僕は柱の陰からそつと屋上の扉を見た。雲一つない、抜けるような青が四角く切り取られていた。今にも、瞼の裏にその空色が蘇るような気さえして、目を開けた。

僕の高校には屋上に天文台があった。県下では母校だけらしいから珍しいのかもしれない。市主催の映画祭で上映する映画の撮影があるから、鍵を開けておいてくれ、と僕

は教師に頼まれた。当時の僕は点数かせぎのために、真面目に過ごすよう努めていたから信頼されていたのだと思う。

屋上の扉は、普段は施錠されている。言われたとおりに扉の鍵と、南京錠を開けた。僕は屋上の端まで歩いた。扉の施錠の嚴重さに反して、屋上を取り囲む柵は体の半分の高さしかない。乗り越えるのはたやすい。僕は端まで歩いた。下をのぞき込む。教師の駐車場が見える。一面のアスファルトには、昨日の雨でできた水たまりがぼつぼつと小さく見えた。同じ形だ、と思つて僕は自分の肩に目をやつた。ワイシャツの袖で隠れる箇所にある丸い形の火傷はじゆくじゆくと膿んでいることだろう。ガーゼを切らずに貼らなくては間に合わない範囲に。脇腹の切り傷はかさぶたになりかけている。しかしこちらもまた、しばらくせずになぞるように傷を付けられるのだろう。絶望は景色から色を褪せさせる。そこかしこの灰色のどこに視線をやつてもぼやけて歪む。僕の心臓はもはや動いていても止まっても同じだ。柵に手をつけて、力を込める。痛みも悔しさも、どこか自分からは切り離されているが、しかし、これ

でもう終わるのだ、やつと終わるのだ、という安堵感は起こった。

そのとき、目の端に、白い何か映った。右を向けば、男子が一人柵を軽々と乗り越えるところだった。クラス委員をしていたから名前を知っていた。同じクラスの榛名だ。何をしようとしているのか。考えるより早く、彼のワイシャツの背中を掴んでいた。

「ごめん、マキちゃん離してくれ」

こちらを振り向きもしないで、榛名は言った。

「マキちゃんって」

「自分、名前榎原じゃん。いいから離せって」

「嫌だ」

そう言うのと初めて、榛名はこちらを向いた。怒つただろうかと思つたら、教室でプリントを渡すときとそう変わらない顔をしていた。

「とにかく、一旦こっちに来ていよ」

「何する。話す？ 話したらもう俺の勝手にしていい？」

「いいから早く。落ちるぞ」

「落ちたいんだよ俺は」

へらへらとした笑顔で彼は言った。どちらかと言えば僕の方が不機嫌だったろうか。榛名はしばらく授業にも夏休みの補習にも顔を出さず、数日前によく学校に来たのだった。カノジョと別れた、とか、緊迫感のない声で友人達と話をしていたのを耳にしていた。榛名は友達も多いし、成績もそう悪くないし、とんでもない不細工というわけでもないし、教室でもよく笑っている。自分より恵まれている人間が、自分と同じ終わりを選ぶうとしている。許しがたかった。

「何で死のうとなんて」

「どうでもいいだろ。マキちゃんこそさつき何しようとしてたんだよ。単に下見てたわけじゃないんだろ」

「そうだ。だからいい加減なことをされても困るんだ」

「いい加減って誰が決めるんだよ。お前？」

心底馬鹿にするような視線を、榛名は僕に寄越してきた。その時初めて僕は彼なりに事情のある可能性に至った。分かったよ、好きにすればいい、と僕は言った。榛名の顔に平生の笑顔が戻った。

「じゃあまず僕が飛び降りるから、そこから先は君の好き

にすればいい」

おお、と榛名は言ったが、すぐに待て待てと手をばたつかせた。

「あのさ、後追い自殺が増えてるんだって、今朝のニュースで言ってたんだけど。バンドのボーカルが死んだとか、お笑い芸人が解散したとかで若者が簡単に死ぬーって」

「それが」

柵にもたれながら僕は尋ねた。榛名は人差し指で指し示しながら言った。

「マキちゃん、俺、で死んだら俺マキちゃんのこと好きみたいじゃん。俺、先にさせてよ」

「そんな曲解する馬鹿がいるという根拠は」

「いないっていう根拠は」

「……君の考えでいくと順番逆にしたら僕は君が死んだショックで後を追うことになるんじゃないか気持ち悪い。そんな話を聞いた後だとますます先に飛び降りたくなつたよ」

彼は言うんじゃないかと思ったとでも言いたげに手のひらで口を押さえた。大体誰のおかげで屋上が開いていると思っ

るんだ、と僕は彼を睨みながら言った。榛名は、マキちゃん委員長なんだから譲ってくれてもいいじゃん、とごね始めた。理由になつていないじゃないかと言うと彼は舌打ちを一つした。いつ撮影の人や教員が来るかも分からない。僕は焦っていた。

「変な理屈でもめるのはやめよう。公平に運でどうだろう」  
「何すんの。じゃんけん？ コイントス？」

「じゃんけんがいいかな。分かりやすいほうがいい」  
僕は彼に近寄った。最初はグー、と言って、拳をつきだしたときに、扉がきしんだ音を立てた。時間切れかと僕は思った。そして映画祭の関係者だったとしても、教員でも、フェンスを飛び越えて落ちてしまおうと、そこまで一瞬で考えた。振り向くとそこにいたのは三つ編みの女子だった。名前も学年も、クラスも分からない。彼女はつかつかと歩いた。赤いラインの入った白い上履きをそろえて脱いで、柵を乗り越えた。

「さっさとしないからよ」

そう、低めの落ち着いた声が耳に届いたかと思えば、あ、と言う間もなく、彼女の姿は一瞬で消えた。しばらくして、

何とも形容のしがたい音がかすかに聞こえた。教室の窓をそこかしこで開ける音も、少し遅れて耳に届いた。僕は呆然として榛名を見た。彼の顔は紙のように白い。一度目を閉じて、榛名はフェンスに駆け寄った。僕も下をのぞき込んだ。灰色の木々、アスファルトと自動車の中で、横たわる彼女と、彼女の血が、小さい黒い水たまりが目に映った。榛名は僕の腕を掴んだ。彼は僕の手を引いた。僕は抵抗しなかった。階段横の非常口の前の隙間に僕を押し込んで、榛名は震えていた。僕だって同じようなものだった。俺達ああなるはずで、と彼は言って、それから先は口にしなかった。

榛名は背を壁につけて、そのままずるとしゃがみ込んだ。僕は頬を非常扉につけた。金属臭さと冷たさを感じた。

「どうしよう。怖くなっちゃった」

僕は頬を扉につけたまま、目だけで榛名を見た。

「どうしよう」

そうぼつりと榛名はこぼした。マキちゃん、何で死のうとしてのたの、と彼は尋ねた。僕は逡巡さえなく、半袖をぬ

くりあげて榛名に腕をさらしていた。まっすぐに彼はガ―ゼと、そこからはみ出した古い火傷や切り傷の跡に目をやっつて、そして僕の顔を見た。声もなく、どうして、と目が聞いていた。

「家族、て言いたくないけど、家族に。進学して家を出ようと思ってるから、あと少しの辛抱なのだけど、屋上に出たら駄目だね。耐えきれなくて」

榛名は黙って聞いていた。同情の言葉や叱咤が出ていたら僕は彼を許さなかっただろう。君はなんで、と尋ねたら、彼は視線を落とした。ぎゅつと目をつぶるのを、無言で見ているなら、彼は急に笑みを顔に貼りつけて、語りだした。「あのな、変態に捕まってるさ、ひと月ぐらいかな、いいようにされてさ。誰にも言うなよ」

隙を見て逃げ出したんだけど、さ、犯人自殺してんのが見つかったみたいで、終わり。彼のワイシャツの袖から覗く手首に、縄の形に、痣が残っているのを見なければ僕は彼の言うことを信じなかっただろう。

「今でも眠れないしさ、何かある度に思い出すし、一昨日あのきつたない部屋の鴨居で首つってるオッサンの夢見

たからもうだめだと思って」

アイツ血を舐めるのが好きだったんだ。背中に包丁でさ、跡付けて。まだ消えない、どうしよう。榛名は笑っていたが、瞳の奥から凍っていくのが見えるようだった。もういいよ、と僕は言った。何も言わなくていいよ、と。

「どうしよう」

もう一度榛名は言った。膝の上の握り拳が、力を入れすぎて白くなっていた。

幸せが、他者と比べることで確認し得るとするならば、僕は彼の手に視線をやりながら重たい頭で考えていた。僕と等しく彼もまた不幸せなのだ。しかし自分は長年の経験で、おそらくは神経が鈍くなっている。最初からいくらかの幸せを持っていた分、彼の方が悲劇的なのだろう。

「ごめん」

「こちらこそ」

「……話せてよかった」

「誰にも言わないよ。約束する」

そう僕が言うと、彼はポケットから音楽プレイヤーを出して、イヤホンを片方、僕に向けた。勉強に関係のないも

のを学校に持つてくるのは校則違反だった。それがなんだ。僕は彼の隣にしゃがみ、それを耳に突っ込んだ。激しいビート・パンクだった。外界を遮断するように、榛名は音量を上げて、目を閉じた。肩が震えていた。彼の頬を見たが、乾いたままだった。

彼と僕とは特段仲がいいわけではなかった。交友関係はずれていたし、その後特に関わることもなかった。しかし僕が進学を決めて家を出るとき、真つ先に彼から連絡が来た。久々に合う約束の日に倒れたのは僕で、一緒に住もうと言い出したのは彼だった。僕にとってハルナは唯一だった。中途半端な共感もなく、生やさしい同情もなく、僕とハルナは都会の片隅で、同じ部屋で息をしていた。一緒に出かけることもほとんど無かったし、会話もさほど多くなかったように思う。ハルナが居たのは僕にとっての幸運だった。僕はようやく自分の見ている世界の狭さを知り、自分を悲劇の登場人物のように見ることをやめた。同時にハルナがいたのは僕の不運だった。悲しみに浸ってしまえば楽になれるのに、ハルナは休むことなく学校に行き、新しく友達を作り、バイトを始め、二人分のご飯を作った後で

決まって、牛乳を小さな鍋で温め、スパイスを少し入れたものを飲んで、そして眠ってと、忙しく生きていた。彼がそうしているのに、自分ばかりが立ち止まっているわけにはいかない、彼の姿を見る度に思った。

ハルナの顔を思い出す。特段人並み外れた特徴があるでもなければ美しいわけでもないし、話したところであだの年相応の男でしかない。友情というにはどこかある点において過剰で、家族と表すには何とも冷淡だった。まして恋愛感情なんて。寒気がする。例えば神だとか、天使だとかを描いた絵や彫刻の類に抱くのに近い感情だった。自分よりも優れた何物か。どことなく、なんとなく、見る人が見れば綺麗だと思ふような。自分の人生と意味付けて感動するような。自分と似たかたちをしていて、より理想的な何物か。僕より早くかつての痛みを消化して、僕よりもずっと強い、人間離れたもの。

扉が開いて、権田さんがビニール袋を二つ抱えて入ってきた。

「遅くなってごめん」

開口一番彼女はそう謝った。ちよつと冷え込んできたね、  
と言いながら、蔵庫に買ってきたものを入れていく。そして  
冷蔵庫のフックにひっかけたままの青いエプロンをつ  
けて、使いにくいことこの上ないミニキッチンに立った。

「好きに使っちゃうよ」

「いいですよ。ごめんなさい」

「ありがとうって言つて欲しいな」

トントンとスリッパのつま先を踏み鳴らして彼女は言  
った。

「ビタミンAっていったら緑黄色野菜だよ。シチューを  
人参多めでいかがでしょう。寒いしね」

権田さんは買ってきたらしい野菜の皮を、包丁で剥きだ  
した。皮むき器ありますよ、と言ったが、別に、と返され  
た。確かに手慣れているらしく、結構な速度だった。久し  
く聞かない包丁の音が響きだして、僕は何でこの人に彼氏  
ができないのだろうか、と思った。しかし彼女が男とい  
う生き物をひどく嫌っていることも知っているから何も言  
わなかった。僕はつけたままだった音楽番組を、ニュース  
に切り替えた。

「ちよつとー、凝った料理しないってわりに、スパイスな  
んかあるじゃない」

彼女は意外だという顔を隠しもしないで、手にした小さ  
な瓶を僕に向けてきた。ナツメグと書かれているのだろう。  
我が家にあるスパイスなんて胡椒かそれくらいだ。就職が  
決まって部屋を出たときに、ハルナの使いかけを貰ったま  
ま、使うことなく棚の奥に入れていたことを忘れていた。  
なんせ使い方がよく分からない。

「野菜とかお肉炒めるときにちよつと入れるとおいしい  
んだよ」

「それをさ、一度に五グラム摂取するとトリップできるら  
しいな。麻薬みたいに幻覚が見えるって、聞いたことがあ  
る」

いつぞやの同居人の受け売りを言うと、権田さんはうな  
ずいた。使いすぎたらそうなるねと言って、瓶を置いて、  
じゃがいもをくるくると皮を向きながら続けた。

「あとは、催眠作用があつてね、ホットミルクに入れたり  
したらよく眠れるんだって。不眠症の友達が言つてたよ」  
僕は変な顔をしていたかもしれない。それに気づかず、



彼女はじゃがいもの芽と格闘している。なにがしかの結論が浮かんだが、それはひどくふわふわとしていて言葉になりはしなかった。瞬きをして、テレビのニュースに目をやる。僕でも名前を知っているようなミュージシャンの写真が映っている。精神的な病気が理由で、活動を休止するらしい。ニュースが港に入り込んでしまったクジラに移ったとき、ようやく僕は冷静になった。僕は偶像を失ったのだ。しかしそれで、何がどうなるということもなかった。腹の裏でハルナは笑ってみせる。その意味も価値も、変わることは永遠にない。

「……春菜さん」

ジュージューという音で聞こえなかったらしい。もう一度エプロンの後ろ姿に呼びかける。

「春菜さん」

木べらが鍋に当たる音がふと止んだ。

「何！」

気持ち悪いほどの満面の笑顔を彼女はこちらに向けた。

「シチューに入れて。ナツメグ」

「了解」

外は暗く、窓ガラスは鏡のように、座る僕を映し出している。朝になればその四角く切り取られた青が見える。その青で、僕は何度でも思い出すのだ。泥臭いビート・パンク。掠れた声。強がりばかりが上手いハルナのことを。

月刊缶じうす 6月号 通巻180号  
2012年5月29日発行

編集人 くろねこ 七原ハルコ

発行所 広島大学文団BOX